

## 巡検報告

### 下北半島 (式教官)

昭和40年8月23日～26日 4年

本州の最北端に位置する下北半島はその地理的位置や社会的要因により、日本の後進地域又は辺疆地域として、各方面から調査対象地域に選ばれ最近では“オシラサン”という祭祀集団についてもマスコミでとり上げられている。

私達がこの地域の巡検を行なったのは今年の8月23日→26日の4日間であった。4日間の調査期間では地域の辺疆的性格について明確には把握しえなかったが、各部落が時の流れと共に各々の方向に動きつつある事を知る事ができ、興味深いことであった。

下北半島には四国香川県と同じ位の広さをもつ東通村という独立機能をもった村落共同体が現在も残っている。その中には更に部落が29あり、その各々の部落があまり結合関係をもたず独自の機能をもち、地域性を形成している。

東通村全体から産業構成、人口比をみると、農業60%、漁業30%、林業10%という数字を示すが、漁業の示すこの数字はここ数年大きく変わったものとみられる。

私達が調査した尻屋、尻労、猿ヶ森の部落ではかつては臨海村として同じ様な機能を持っていた。然し、にしん漁場の衰退、駒ヶ岳噴火によりコンブがとれなくなった事、又防衛庁が試射場を建設した為に漁場が破壊された事等の原因により、明らかに違った方向へと移行しつつある。

尻労では男子の過剰労働力を出稼ぎという消極的態度で解消し、女子供が自給程度の農業を行なっている。猿ヶ森では猿ヶ森納屋が破壊された為、純農の方向へ向かいつつある。但し、尻屋のみは、漁業を上述した点は克服、次男、三男という家族労働力の供給を受け、更に高度の方向へと進みつつある。漁業の比が6:4であったのが8:2という比率に変わり、漁村としての機能を強化している。

以上の様に三部落のみでは説明も不十分ではあるが、時の流れと共に、今迄の地域性を更に強化している部落、違った方向へと移りつつある部落(この場合建設的に)又逆に現在の機能を崩壊しつつある部落と、独自の方向を決定しつつある。この様な事は決して下北半島のみでみられる事実ではないかもしれない。

(4学年 畑野)

### 奈良盆地 (渡辺教官)

昭和40年10月

渡辺先生の引率により、私達2年生一行16名、秋休みを利用して奈良盆地の巡検をしました。この度の巡検は2年生の前期がやっとすんだばかりで専門知識に乏しいということもあって、日本の文化の発祥地で、地理学的にも typical なものが多い奈良盆地全体を自然的にも人文的にもあらゆる角度から見よう、ということで出かけました。しかし、もちろん奈良盆地全てを調べたわけではなく、盆地内での特色ある地域を選びました。行った地域は次の如くです。小林部落(御所市)今井町、稗山(大和郡山市内)大和郡山市内。奈良盆地の自然は地形的には西側を生駒、金剛の傾動地塊の地壘山地によって大阪側とさえぎられ、東側は大和高原の断層崖、西南は葛城地壘の断層崖によって囲まれた断層湖盆地です。私たちが行った小林部落は御所市西北部、すぐ背後が葛城、金剛山脈の断層崖となっており、ここで実際の断層崖を見わけです。この断層崖の前面には granite の礫からできた扇状地が発達していて、この上を流れている急流河川のため谷が形成されており、断層状に何段にもなっていました。いわゆる眉毛状断層です。小林部落はこのように上に集落を形成していました。帰りは御所駅まで歩きましたが、その途上、近畿特有の大和棟を持った家々があちこちに見られ、柿の赤い実と大和棟との取り合せが何とも云えない日本人の郷愁を誘い、大和だなーと思ったものです。このような地形条件のもとにある盆地内には東西、南北に直交する道路、それに沿ってある集落、溜池、耕地など古い条里制の名残りが各地に見られました。

その中で今井町は発生的には寺内町、形態的には環濠集落の町で、寺院を中心として方四町、ごばん目の街区を持ち、周囲に濠と土居をめぐらしています。元来は農民が主体だったのですが、油座として発展し、古い中世の瓦の特徴である本ぶきの瓦の屋根を持った家屋がぎっしりと立ち並び、中でも豪商の強勢ぶりを思わせる八つ棟作りの屋根と壁のりっぱな紋章を持った家が優美な外観を呈していました。渡辺先生のお話では今から7年前にやって来た時とちっとも変わっていない、とのことでしたが、さにあらず、7年どころか古い中世から全然変化していないみたいで、どうかすると私達が中世にたちもどった様な錯覚を受けたものです。20世紀の文化がこの町にだけ入りこまず現在に至った様な感じてした。

次に稗田へ行きましたが、この町も環濠集落の典型的なものです。一見した町の感じでは集落の回りに濠が設けられ、一つの集落として完全に孤立しているようで、中は狭い小路でへだてられているのです。ここも盆地内の他地域と同じく農村家内工業が入りこんでいるとのことでしたが町の中はシーンとしていて、万葉の昔、稗田阿礼か誰ぞが和歌なんぞ作っている光景にぶつかりはしないか、というような気をおこさせる所でした。ちなみにここ稗田は稗田阿礼に関係あるとかないか……ここ稗田から黄金色、あるいは刈入れを行なっている田んぼの中を歩いて15分位、郡山市の中心部に出ました。金魚養殖として有名なこの市は発生的には城下町で、金魚養殖も藩の政

策として始められたとのことでした。町の中心部は城下町の名残りが見られ、現在は繊維産業が主な産業です。そして周辺の農村部で農家の副業として前に述べた金魚養殖が行なわれているのです。

以上、私達の奈良盆地巡検は終わりましたが、京阪神の近郊地域という性格を持った奈良盆地は外見的には大きな工場もなく、あくまでも古い文化の名残りを留め、静かに、のんびりとしているようですが、その内部では刻一刻と新しい変化が生じているのではないかと思います。

(3学年 小倉)

### 渥美半島から糸魚川へ (正井 教官)

昭和41年3月8～11日

正井先生と1年生14名で、日本列島を横断する目的で、3月8日に東京を出発した。

第1日の3月8日は渥美半島の土田で花卉栽培を見学した。もともと漁村だったこの村は花卉栽培に転じ、現在では自動車運送の発達により、夜出荷して翌朝東京の市場へ出している。電照菊を中心に、ストック、キンギョ草、夏にはメロン、トマトの栽培を行なっている。その他太平洋をながめ、いわゆる表日本式気候地域の植生と家屋の特徴の観察も行なった。

第2日目の8日は、豊橋一松本間における主に車窓からの観察。天龍峡と辰野で途中下車し、防風林、積雪状態、段丘、桑園(扇状地)、冬作物の種類とその状態等を主に観察した。

10日と11日は前日の観察事項の他、中部日本の典型的農山村と深雪地帯において、雁木、中門、横木、防雪林、防雪さく、雪がこい(トンネル入口)、流雪溝等を観察した。この両日には日本海を眺めて、裏日本式気候地域の全体的把握を行なったのである。

糸魚川への途中「やなば」で途中下車、主に積雪状態を調べた。3月の中頃だったので、雪は、20cm位の深さであり、融雪水が道路にあふれていた。さらに信濃四ツ谷(北アルプス登山口)でも下車し、次の信濃森上駅まで歩いた。アルプスの山々を臨み、都会の雑踏を忘れ、さわやかさを味わった。太平洋を臨んだ時は雨がしとしとと降って肌寒く、日本海に出た時には、晴天で風は強かったが、かなり暖かく、予想とは全く逆の状態であった。巡検の度毎に地理学への興味が湧いてくるようであり、皆次第に地理学に熱中していくことであろう。ただ、そのために私達が、狭い殻の中に閉じ込める人間にならないように絶えず注意したい。(2学年 森山)